



## 患者さんの悲しみに寄り添い、 心を癒す薬剤師のグリーフケア

山科区にある、ゆう薬局の薬剤師Qさんは、幼い頃から「人助け」になる職業に興味があり、新卒で大手調剤薬局に入社。薬局を日替わりに巡回する毎日で、患者の顔を覚える間もありませんでした。さらに立場も変わり現場以外の業務が増え、務めた薬局を離職、ゆう薬局に転職しました。

「目の前の人を助ける薬剤師になりたい。その初心に戻れたのがうれしいです」。

そんな「人助け」を象徴する出会いがありました。認知症で癌を患っている80代の牧さん(仮)。夫が入院中でひとり暮らしです。

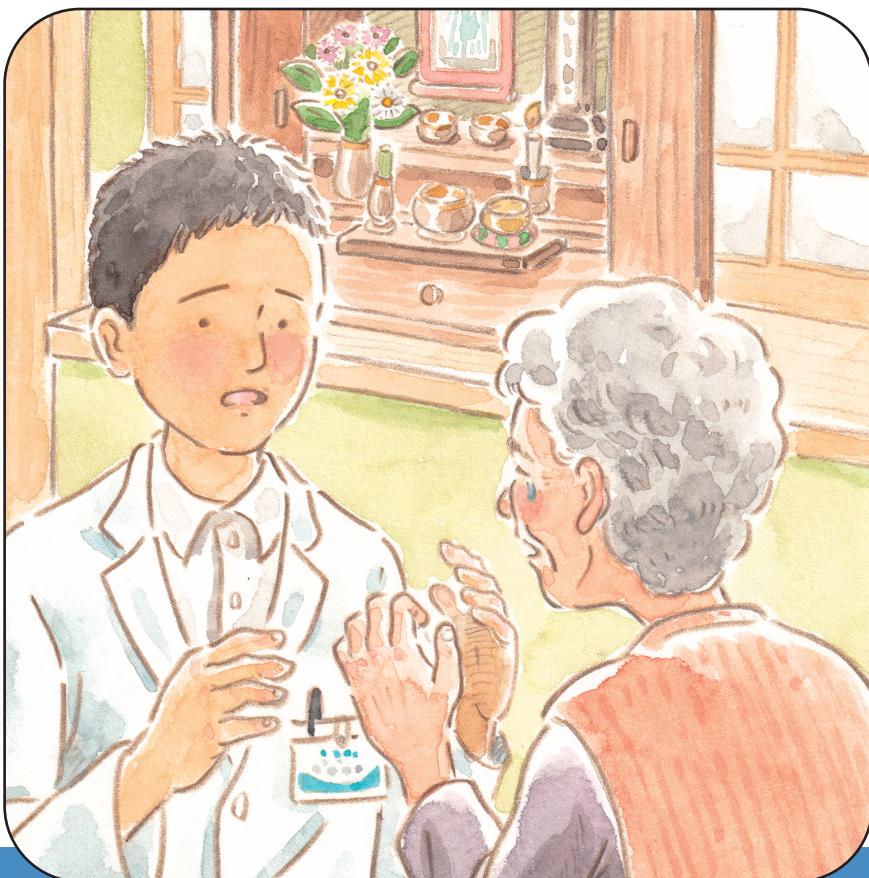
Qさんは2週に1度の薬剤管理訪問を始めましたが、たびたび「薬がない」「飲み間違えた」と連絡が入り、毎週訪ねることも。訪問の度、牧さんはQさんのために、様々な飲物を用意してもらってくれました。毎回10～15分ほど、牧さんは昔話や世間話を楽ししそうにQさんに語ります。Qさんは「僕と話すことが楽しいんだな」と感じました。半年後、牧さんの夫が退院し、老々介護が始まります。夫は「痛い」「痒い」「あれが

ほしい」とわがまま放題。牧さんはストレスでQさんにも愚痴ばかり。ところがひと月後に夫が急逝。そんな最中に牧さん宅に訪問することは迷いましたが、薬が切れではないと思い切って訪ねました。すると牧さんはこんなふうに語り始めたのです。

「夫はわがままで大変やつた。でも亡くなると寂しい」。じつと耳を傾けていたQさんは、親戚でもないQさんに、牧さんは胸の内を明かしたのです。「一番辛いときは私に思いを吐露してくれた牧さん。普段から話しゃべり関係を作っていてよかったです」。

一般に、家族の死別の際には体調を崩し、認知症も進みやすいと言われます。そんなとき、悲しみに寄り添う「グリーフケア」は大切です。信頼する相手に感情を吐き出し、心を癒してもらうケアで、牧さんはその後も、比較的おだやかに過ごしています。

Qさんは他にも、何気ない会話を通し、患者さんの体調を察知することを心がけています。ゆう薬局の薬剤師はそんな風に、患者さんと向き合っているのです。



なんでも相談できる「ゆう薬局」には、お客さまとの物語があります。